



戸本一真の イベントイングライフ in UK

2016年8月～12月

vol.04

✿ 国際総合馬術のフォーマットとスター・レベル

7月上旬にはインターナショナル競技デビュー、Vikenti では渡英して初めて XC（クロスカントリー）でタイムイン（規定タイム内でゴール）することができましたが、Tacoma はクロスカントリーで3反抗失権という結果でした。7月末のアイルランドで行われたインターナショナル競技では初めて CCI-L 競技（3Day で行われる公式フォーマット）に出場し、3日間全ての種目を無事に完走することができ、大きな経験になりました。

コンスタントに競技経験を積み、トレーニングを続けていることで馬との関係性は良くなっています。また、自分自身の姿勢や癖を直すために多くの時間を費やしました。小枝をはさんで脇が開かないようにする、肘を曲げて拳はややねかせてその姿勢を鏡でチェックする、後ろから撮影してもらって体の歪みを確認するなどです。基本的な事柄が多く、トレーニングの進度としては後退しているのではないかと感じることもありますが、今、この癖を直さなければこの先のレベルアップはなく、これが直れば全てがうまく回り出すことを信じて、長い年月をかけて体に染みついてしまった悪い癖を一つずつ矯正しています。

2022年現在、国際総合馬術競技は CCI-L（ロングフォーマット）と CCI-S（ショートフォーマット）の2つのカテゴリーがあります。CCI-L は3日間かけて馬場→XC→障害の順に行われ、クロスカントリー競技の距離が長くスタミナが必要なもの、CCI-S は障害が XC より先に行われる場合もあり、XC の距離も短いことが特徴です。2016年当時、CCI-L は CCI、CCI-S は CIC と呼ばれていましたが、2019年から現在のカテゴリーとなっています。

また、スター・レベルについても2019年に FEI ルールの改定があり、それまでは1* から4* まででしたが、これまでの1* が2*、これまでの2* が3* というように、スターの数字が1つ上がり、最高難度のレベルは4* から5* と表記するようになりました。

このコラムでは、CCI-L、CCI-S という現在のカテゴリーおよびスター・レベルに基づいて表記していきます。

✿ 各馬のトレーニングと競技会出場

Brookpark Vikenti

2016年当時8歳 セン アイリッシュスポーツホース

繊細な Vikenti はリラックスして競技に臨めるかが課題ですが、初の3Day の CCI2*-L 競技（当時の CCI 1*/Camphire International Horse Trials）では、早めに入厩したこともあります。会場の雰囲気にも慣れて落ち着いた状態で初日を迎えることができました。ただ、演技終盤に急に風が強くなり、燕尾服の裾が馬体に当たるのを Vikenti が気にして、後肢の手前が変わらなどのミスが出来てしまいました。もともと敏感な馬なので、燕尾服が当たるのを気にすることは想定しており、数日前から燕尾服を着てトレーニングを行なって慣れさせていたのですが、

風とともに強く当たったことで馬が驚いてしまいました。

クロスカントリーは、これまで出場した競技会とは違い距離が長く、難しいコンビネーションが多く設置され、さらには障害間の距離が長いため「走る」「コントロールする」という、コースデザイナーからの要求が明確であることなど、CCI-L 競技ならではの難しさが多く見られました。前回（8月号）触れたように、1つのコンビネーション障害に対して複数のラインが存在するので、馬によって、あるいは A の入り方次第で B へのアプローチや歩数を変えなければならないこともあります。瞬時の判断が要求されました。ただ、コースの全長が長くタイムを稼げる箇所がいくつもあって CCI-S と比べてタイムインしやすいこともあり、余裕をもってゴールすることができました。

これまで 1Day あるいは 2Day で行われる競技に出場してきたため、クロスカントリーを走った翌日に障害馬術という流れは初めてでした。準備運動の段階から馬の状態を把握することに専念し、前日の XC で疲労している筋肉をほぐすことから始めました。競技本番でも Vikenti の状態は良く、問題なく減点 0 で 3 日間を完走することができました。

初めての雨の中出場した競技では、馬場馬術競技で緊張して運動にならなかったこともあります。乗り方や使っている道具は何一つえていないので、雨が耳や体に当たることで神経質になってしまったようです。雨が当たることで緊張してしまう程繊細だとは思っていなかったので、今後は雨の日の競技は運動の組み立て方を工夫する、イヤーネットをつけるなどの対応が必要ですが、緊張の原因が雨であることが分かったことは今後に繋がることなので前向きに捉えようとしています。

同じ 1Day 競技会のクロスカントリーで Vikenti が初めての拒止をしました。大きなテーブル障害から 5 歩でコーナー障害というコンビネーションでしたが、完全にライダーのミスでした。1 つ目のミスは、A のテーブル障害で踏み切りがやや遠くなってしまい、馬が大きく飛越したことです。私のプランではしっかりとコントロールされた駆歩で近い踏み切りから飛越させ、着地と同時に B のコーナー障害に向かうつもりだったのですが、A を大きく飛ばされたことで理想のラインから外れてしまいました。2 つ目のミスは着地後に素早くコントロールできたことで「これならいいける」と思い、惰性で B に向かってしまったことです。A でプランから外れても、B に向かって油断せず確実にアプローチしていれば十分にリカバーできた拒止でした。

シーズン後半となる 9 月に出場した 1Day 競技のインターメディエイトクラス（ナショナルの 3* クラス）では、Vikenti と共に馬場馬術で過去最高の 76% をとることができました。感覚・内容・結果が一致していたことが私にとって重要で、とても嬉しい結果となりました。その一方で、クロスカントリーの難易度はさらに上がり、下りの障害で「意図的に手綱を伸ばす」



技術の必要性が増してきました。私の感覚では手綱を伸ばしているつもりなのですが、実際には伸ばし足りておらず着地で馬に連れ去られてしまい、人間のバランスをキープすることができないため、着地後の動作が遅れることが何回もありました。この先のクラスではドロップ（下り）からのコンビネーションは当たり前のように設けられるので、何とかこの技術を習得し、レベルアップしていくかなければならないと感じています。

9月末のCCI3*-S（当時のCIC2*）がシーズン最後の競技会でした。来シーズンへ向けての足がかりとなる重要なインターナショナル競技会だったのですが、クロスカントリーで人馬転倒して失権という最悪の結果になってしまいました。

転倒したのはコース終盤の水濠に設けられたコンビネーションでした。Aの生垣から5歩でB、Bから4歩で幅の狭いCというトリプルでしたが、Cに対する踏み切りが曖昧になり、3.5歩で飛びつこうとするも飛越が中途半端になって障害物の上に乗り上げるようにバランスを崩し、馬ごと前転してしまいました。いろいろな要因が重なっているのですが、直接的なミスは私がBからCに向かって「コントロールして4歩」という選択をしたことにあると思っています。私が4歩を選択しているにも関わらず、馬が3歩で踏み切ったということは、4歩よりも3歩が正解だった（馬にとって簡単だった）ということ。次に、コース後半でコントロール性が悪くなっている状態の馬をコンビネーションの間でコントロールするよりも、コンビネーションの間は馬に同調してリズムを乱さないよう流れに乘っていき、コンビネーション通過後にコントロールし直す必要があったということ。すなわち、コンビネーション間では“コントロールしきれていない状況にあったとしても、通過することを優先すべき”だったのです。

落馬したコンビネーションの後に急な坂を下り、また上り直した先にコンビネーションがあったので、私はどうしてもここでコントロールしておく必要があると考え、たとえこの障害を3歩で押し切ってクリアしたとしても次で失敗するのではないかという判断から4歩を選択しました。この「コントロールしきれていない状況であったとしても」という状況は、クロスカントリー特有の感覚と技術だと感じています。障害馬術や馬場馬術では、コントロールできていなくても押し切ることが正解ということはほぼありません。当然のことながら100%馬をコントロールできている状態が理想です。もちろんクロスカントリーでも100%コントロールできていることが理想なのですが、状況によってはコントロールしきれていなくても流れに乗っていく方が正解になることがある。ということだ

と認識しています。

シーズンオフには二蹄跡運動のトレーニングを強化的に行いました。

今は角度の浅い肩内と腰内がバランスを崩さず確実に行えるようにしている段階で、ハーフパスに関してもベンドの浅いハーフパスに止め、バランスやリズムが崩れないことを重視してトレーニングを行なっています。肩内では蹄跡から5mほど離れた位置で行い、壁やラチに頼らず馬自身にアップヒルのバランスを保たせること。腰内とハーフパスでは図のよう、両肩のラインと進行方向が垂直になることを意識するように指導されています。図はあくまでも私のイメージであり極端な表現になっていますが、ベンドがキープできない馬に対してハーフパスのトレーニングを行う準備段階という位置づけです。

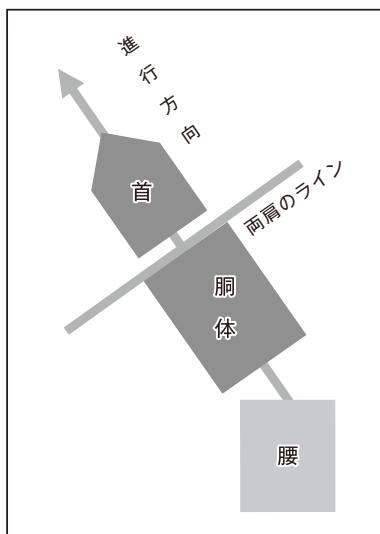
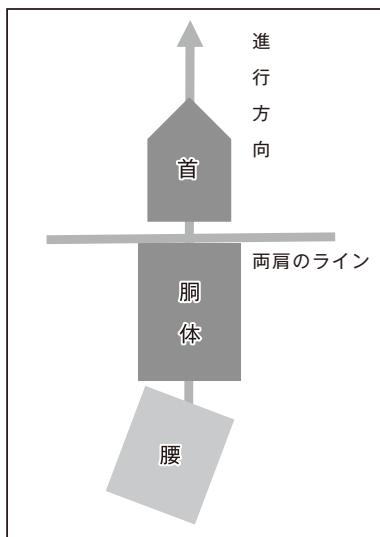
このトレーニング方法は、これまでにも日本で私が騎乗していた障害馬にも取り入れてきたトレーニング方法であり、特別新しいものではありませんが、特に両肩のラインを強く意識することによって、馬がどのようにバランスを崩しているのかを明確にすることができます。

ハーフパスも同様に進行方向と両肩のラインを強く意識して斜線上で腰内を行い、アップヒルのバランスをキープさせます。競技会で求められているハーフパスとしてはベンドが不足しているため高得点につながるハーフパスではありませんが、あくまで準備段階としてこのようなトレーニングを繰り返し行い、より良いハーフパスを行うために必要な筋力をつけていたといった状況です。

Tacoma D'hoset 2016年当時9歳 牝 セルフランセ

初の3Day競技は、Tacomaでの3Dayならではの失敗があり、馬場馬術でこれまでに最も悪い得点率となりました。Tacomaはもともと落ち着いた性格で、これまでの1Day競技では入厩から競技までの時間が短いため、程良い緊張感の中で競技に臨むことができていました。しかし、今回は3Dayで月曜日に会場入りしたことにより、馬が会場の雰囲気に慣れ過ぎて、悪い意味で緊張感のない演技になってしまったのです。

クロスカントリーはVikentiより先に走行しました。通常、クロスカントリーの下見では1分ごとの到達地点を確認します。スタートしてから1分でこの場所を通過、2分でこの場所を通過……というポイント（場所）を見極め、それによって自分の走行スピードと残りのタイムを把握しながら走行します。これを「ミニツップポイント」と言います。今回は感覚をつかむため



戸本一眞の イベンティングライフ in UK

に、あえてミニツツポイントを計らずに走りました。そのため前半に飛ばし過ぎてしまい、それに気付いた後半は馬なりにしたのですが、規定タイムより30秒以上早くゴールする結果になってしましました。このクラスでは余力を残していましたが、今後クラスアップしていけば最後まで体力が持たないことになってしまうので、スピード感覚やペース配分は私自身が体得していくかなければならない技術だと感じました。

先に走行したVikentiが拒止をしてしまった1Day競技では、その失敗をTacomaで取り戻すべく細心の注意を払って走行し無事クリアすることができました。感触として2頭の違いは「コンビネーションの中でさらに強く乗っていけた」というところでした。TacomaではAのテーブル障害の着地後すぐにコントロールし、そこからさらに推進して強い駆歩を作りだすようにしました。コンビネーションではあるものの流れだけ（リズムだけ）でアプローチするのではなく、B障害も単独の障害物としてパワーを足してアプローチするという感覚でした。トレーナーの土屋毅明氏からは「馬を信用して走行しなければならないが、いつ躊躇されても対処できるだけの準備はしておくように」と日頃からアドバイスを受けています。これからは100%馬を信用したうえで、さらに必要に応じて強く乗る技術を身につけていきたいと思います。

◆まとめ

総合馬術に転向した最初のシーズンが終わりました。シーズンの最後にきて初めての落馬失権、そしてTacomaが厩舎内で大怪我をしてしまうなど、悔やまれる事が続き落ち込んだまま最初のシーズンが終わってしまったように感じています。しかしながらこの1年間で学んだこと全ては、私にとってとても価値のあることばかりであり、障害や総合といった種目に関わらず一人の馬術選手として大きな財産になってくることは間違ひありません。

これは騎乗の際に必要となる技術だけの話ではなく、精神的な面においても感じており、馬術の本場ヨーロッパでシーズンを通して競技会に出場したことで学んだものは多く、日本では経験することができなかつたものとなりました。

また、「今の私が世界的に見てどれほどの選手なのか」ということを明確に知ることができました。毎週のように競技会に出場してはオリンピックでメダルを取るような選手と戦い、その技術を目の当たりにし、私とその選手との間にどれほどの差があるのかを肌で感じることで、現在の私の実力を嫌でも知らされることばかりでした。総合馬術という種目柄、馬場・クロスカントリー・障害とそれぞれで差がある場合、たとえ1種目の差は小さくとも、3種目の合計ともなれば大きな差となって結果に表れます。当たり前のことでですが3種目の合計点数が最終的な結果なので、今の私では結果にも大きな差があることになります。また、イギリスは総合馬術が人気の国というだけあって、世界的には有名ではない選手ですら今の私からすればとても上手な

選手ばかりで、総合馬術初心者とも言える私が同じ競技会で戦えば、今の私の実力を知るには十分過ぎる結果でした。この「己の実力を知る」ということこそが私の1年目の収穫であったように感じています。

◆ 番外編

私が住んでいるところから車で15分ほどの距離にある、《Burghley House》という会場で、世界屈指の総合馬術の大会である《Burghley Horse Trials》が行われた。5月に開催される《Badminton Horse Trials》と並ぶ2大5*大会で、オリンピックや世界選手権以上に難しいとも言われているハイレベルなXCコースとして知られている。実際にコースを歩いてみたのだが、「本当に馬が飛び越えられる障害なのだろうか?」と思える障害がいくつか存在したので、その中からベスト3を紹介したい。

とは言え写真ではそのスケールが伝わらなさ過ぎて、非常に残念である。



第3位 テーブル障害

私はそれほど大きな体ではないが、それにしてもこのテーブルの大きさが伝わるのではないだろうか? 驚くべきは、これが第3障害という「序盤の序盤」にある障害物ということ。



第2位 乾壕障害

この大会の名物障害とも言える障害物で、踏み切る地点から着地地点までは4m以上の幅がある。

私が立っている場所は乾壕の中なので、さすがに私が立っている場所から飛越するわけではないが、それでも恐ろしい。



第1位 バンケット障害

写真を撮っている場所から、1完歩で私が立っている場所まで飛び下りることになる障害物。写真の上部に写っている2人がとても遠く小さく見えることを考えても、その落差が伝わるだろう……いや!伝わらない!!

私が感じた恐怖感は、この写真では伝わらなさ過ぎる!!